

LL教材作成の視点

幸 野 稔

Some Viewpoints on the Programming for the Language Laboratory

Minoru KONO

1. はじめに

本稿は Language Laboratory (以下 LL と略す) が外国語教育 (本稿では英語教育) に寄与する面とその教材作成にあたって配慮すべき点を考察し、本校 (秋田工業高等専門学校) を含めて現在までの高校段階の教材例を検討しながら、高校用 LL 教材のあり方を論ずるものである。

2. LL の効用と限界

我国の英語教育は従来外国文化摂取の手段として、読解力の養成に主力を注いできた。このような傾向に対して最近、国際交流が盛んになるにつれて、英語を国際間のコミュニケーションの手段として教育しようという反省が強まってきたのであるが、その中で LL は英語教育改革のための有効な教具として脚光を浴びはじめた。LLこそは英語教育革新の原動力であるという論さえ現われた。(1)

新しい教育機器が普及しはじめる時期には積極的推進派と絶対的反対派に両極化しがちであるが、LL の場合も例外ではない。我々はその効用と共に限界をも十分に認識して、英語教育にもっとも効果的な活用をはかるべきであろう。

言語学習には hearing, speaking, reading, writing の4つの要素があって、LL が直接効果を発揮するのは前の2つの分野においてであり、後の2つの分野の指導は教室作業に任せられる。

LL の効用と限界は、およそ次のようにまとめられる。

効 用

- (1) native speaker の声を、全員が同じ音量で聞くことができる。
- (2) 各人の練習量が豊富に確保される。
- (3) 自己のペースで学習できる。(教師側からは、個人指導が徹底できる。)

限 界

- (1) 機械的な練習になりやすいため、興味の持続が困難である。

(2) four-phase drill の形式をとるために creative production にまで発展させにくい。

(3) 指導に融通性がきかない。

このような限界の故に、hearing, speaking の分野でさえ、教室作業との関連なしには LL 作業も生きてこないことは明らかである。すなわち LL を効果あらしめるか否かは、一つには英語の指導計画全体の中での適切な位置づけいかんにかかっている。

Lado によれば、LL の位置づけについては、次の2つの見解があるという。(2)

(1) the center of language teaching, with the teacher assisting the lab operation and adjusting to it (外国語教育の中心であり、教師は LL の操作を助け、それに従うもの)

(2) a teaching aid, with the class as the center (補助教具であって、教室が中心となるもの)

前述の LL のもつ効用と限界を考えると、筆者は当然後者の見解を妥当なものとする。Lado はさらに教材面から次の理由をあげて後者を支持している。(3)

(1) 万能の立派な教材を作ることは、教師の仕事を補う教材を作ることより困難で金がかかる。

(2) 完璧な教材は古くなるのが速く、すぐに時代遅れになる。

(3) そのような完璧な教材は、教師がそれを調整し、学生に合わせて編集しなければ、硬直して扱いにくいものになる。

これらは教材作成について考慮すべき重要なポイントを含んでいるが、次章にその検討をゆずる。

他方、LL に対する根強い反対や疑問が寄せられているのも事実である。具体的な検討は「現代英語教育」で行われているが、(4)本稿ではより基本的な問題にしぼって考察したい。

言語教授理論には audio-lingual habit theory と code-learning theory の2つの流れがある。後者の流れをくむ古典語学習のための grammar-translation method の反動として、前者の流れをくむ natural method, oral

method, oral approach 等が提唱されてきた。最近再び前者——特にその habit-formation theory——に対して変形生成文法家から疑問が提出されている。言語能力には competence と performance があり、言語学習とは competence を体系的、演繹的に開発することであるというのがその主旨である。(5)この立場からは、一見LLは無用となるように思われる。

しかしながら、実際我々が教室で英語を教える場合、必ず何らかの意味で接契的な方法をとっているはずである。drill のみで理解させる作業をしなかったり、説明のみに終止して drill を全くやらないということは、英語教授の少なくとも基礎段階では行なわれていないはずである。福原麟太郎氏のいう「意識的に英語の組み立てを覚えるということと、耳と口とで聞いて喋って覚えるということ」(6)を多かれ少なかれ併用しているはずである。変形生成文法を英語教育の場で実践した岩手大学教育学部附属中学校の場合でも、「ことば自体の意図的自覚的操作」を結局は「無自覚な自動化された操作」へ移行させることをねらっており、(7)また変形生成文法をLLに応用するという実践例も発表されている。(8)音声訓練の必要性を否定できない以上、LLの有用性は決してなくなることはない。

もちろん、LLがなければ音声訓練ができないというものではなく、また音声訓練はLLにまかせて教室では文法的説明と訳だけすればいいというものでもない。教室作業とLL作業が一貫した原理に立ってこそ、はじめにLLの存在価値が発揮されるのである。

LLが音声訓練の場であるというとき、音声とはすなわち会話のことと短絡して、週1、2時間程度の授業では効果があがらないと批判する声もある。音声能力は確かに会話能力の基礎となるものであるが、決して会話そのものではない。学校教育の目標は、ただちに役に立つことよりもむしろ将来みずから勉強できるための素地を作っておくことである。しかも、音声能力の伸長と読み書き能力の伸長は決して無関係でないことは、経験的に理解できるところなのである。

3. 教室教材との密着性と普遍性

すでに何回か強調したように、LL作業は教室作業と一貫した原理に立って密接な関連をもつときに、はじめにその効果を発揮する。LLの生命は hardware もさることながら、教室教材と結びついた software の開発にある。LLが日本に普及して以来、市販の教材の開発はかなり進んだのであるが、実際に使用する場合は、市販教材の自家編集も含めて、何らかの形の自作教材とならざるを得ない。しかも Lado が指摘しているように(前

章参照)、はじめから完璧な教材である必要はなく、学生の実態に合せて、必要に応じて改訂すべきものである。

教室教材と結びついた教材という観点からすれば、教科書と密着した教材を作るのが最上ということになりそうだが、果してそれでよいのだろうか。中学、高校、大学によって教材の性格は異なるが、ここに高校用教材の性格についての天満美智子氏と長谷川信氏の意見を紹介する。

天満氏は言う。「中学用の教材は一応教科書に準拠し、密着してゆけばよい」し、大学用の教材は「教材作成者の好みに応じたものでも、学生はそれなりの意義を見出してだまってついて来てくれるという面がある」が、「高校用の教材となると、そのどちらに偏してもいけないように思われる」。(9)また長谷川氏は言う。「極めて大雑把な言い方をすれば、中学生においては教科書に膚接する音声教材を、高等学校においては前者a) (筆者注——中高の英語教育で扱う言語材料を包含した教科書を離れた音声教材)の形態のものを用いることが適当といえよう。その理由としては中学の段階においては基礎的言語材料の習得に、高等学校においてはその応用能力の拡充に重点が置かれるべきだと考えるからである。」(10)

また高橋満氏は言う。「LL教材が具備すべき2つの相矛盾する条件が考えられる。その1つは普通授業使用教科書との『密着性の条件』であり、他の1つは『普遍性』の条件である。」(11)この2つの条件を同時に満足させるのは大変困難な課題であるが、今まで作成されてきた高校用教材にはそれなりの努力の跡がうかがえる。それらは次のように分類される。

A. 教科書と結びついたもの

- (1) 文法と結びついたもの(12)
- (2) 作文と結びついたもの(13)
- (3) リーダーと結びついたもの(14)

B. 教科書を離れたもの(15)

Aの場合、教室作業との一貫した指導ができて効率的であるが、教科書が変わるたびにLL教材を書きかえざるを得ないという欠陥がある。新潟高校ではそれを克服するために数種の文法教科書から共通の文法項目を抜出して、それを定着させるための drill を配している。また pattern 中心であるために応答の単一反応性が容易に確保できる。反面 situation が欠除しているために文法の drill はどうしても機械的なものになりやすく、興味を持続させることが困難となるという欠点が生じる。

高田高校では、oral composition をLLでやるという

見地から、作文のテキストと結びつけて、よく工夫された教材を作っているが、文法教材の場合と同様に機械的な pattern の練習に陥る危険性がある。

愛知高校では、situation を背景にした教材としてリーダーと密着した教材を開発している。pattern practice 的なものとリーダーの situation を利用した question-answering drill が非常に巧みに配合されていて、立派な教材である。それでもなお、教科書変更の際の教材書きかえという問題に加えて、もう二つの疑問が残る。一つは文体の問題である。LL の教材には口語体が適しており、あまりに文語体的なものはふさわしくない。そういう点で現行の高校用リーダーの英文には LL 教材として適さない部分がかかなりあると思われる。二つは LL で hearing ability の養成をねらいとする場合、まず最初に教科書の文字を見るというのでは、(たとえ oral introduction から始めるとしても、その前には家で予習をしてきているのであるから)、その目標は達成できないと思われることである。hearing 教材は文字に全くふれずに聞きとることからはじめなければ、真の意味で聞きとったことにはならないからである。

B の場合は、教室教材との密着性の条件は満足できないことになり、その点この種の教材を使用している松江高専でも自作教材を使用するのが理想であると述べているが、informant が得られないためにやむなく市販教材に頼っているという。この場合でも教科書で扱う言語材料から発展した応用能力の拡充をめざす LL 教材を見出すことは可能であろう。

4. 本校の実践報告

本校の LL (Sony ER-4D) は、昭和41年度以来1, 2 学年を対象にした授業に使用されてきた。私がはじめて第1学年の LL 授業 (週1時間) を担当したときは、English Language Services 発行の Intensive Course in English, Elementary Course, Part 1 と大修館発行の「英語の発音の指導」を適宜編集して使用した。前述の分類では B タイプに属する教材である。最初のうちは LL に対する物珍らしさも手伝ってか興味をもってついてきたように見えたが、しだいに反応が鈍くなって倦怠感を示すようになった。原因はやはり教室作業と無関係だったこと、評価をしなかったこと、drill が structure 中心で、situation のない短文の練習に終始したことである。高校段階ではやはり生徒の知的発達にそくした内容中心の練習にきりかえる必要がある。(16) そこで昭和44年度第1学年の場合は、前述の各タイプの長短を考慮に入れた上で、次の基本線にそって LL 授業をはじめた。

(1) まとまった筋のある口語体で書かれた story を高校用 AB リーダーからとる。

(2) 録音教材作成には教科書附属のテープを活用する。

(3) 言語材料はできるだけ既習のものになるようにする。

(4) 前もって印刷物を見せずに、完全な hearing から始めて reading—speaking—writing に至る総合学習をねらいとする。

(5) Pre Lab—Lab—Post Lab の一貫した流れの中で指導する。

(6) 毎回必ず評価をする。

LL 教材の学習には、一週の英語授業時数6時間のうち、Pre Lab, Post Lab を含めて2時間をとった。正規のリーダーの時間は別に2時間とって、LL 教材には副リーダーの性格をもたせたのである。1 cycle の学習過程は次の通りである。

A. 家庭学習——① 語句プリントの予習

B. Pre Lab Work——(1) 教材聴取

(普通教室で50分) (2) ②聴解力予備テスト

(3) 教材解説

(4) 音読練習

(5) 整理

C. 家庭学習——教材暗記

D. Lab Work——(1) ③教材録音

(LL 教室 (2) 注意

で40分) (3) 再生練習

(4) ④筆答評価

E. Post Lab Work——⑤口答評価

(LL 教室で10分)

この過程にそって、第2回目を実施した "In the Classroom" (好学社 Our English 1 New Edition, Lesson 1. The New School Year) から教材例をとって以下に解説する。

Text

My name is Haruo Tanaka.

I am fifteen years old.

I am from the First Junior High School.

My house is two miles from this senior high school.

I come to school by bicycle.

It takes me about ten minutes to come to school.

etc.

①本文のプリントを渡す前に、次の語句プリントを渡し

て予習してこさせる。

- 1) He *is from* the Minami Junior High School.
- 2) His house *is eight kilometers from* this school.
- 3) *It took* me three hours *to* do the work.

etc.

②プリントを見せずに、教材テープ聴取後に口頭で次の聴解力予備テストを行う。

- 1) Are you a girl?
- 2) Is your name Haruko Tanaka?
- 3) Are you fourteen years old?
- 4) Are you from the First Junior High School?
- 5) Are you a senior high school student?
- 6) Is your house two miles from the First Junior High School?
- 7) Do you come to school by bus?
- 8) Does it take you about ten minutes to come to school?

etc.

これらの質問に Yes か No で答えさせた後、答案を隣同志で交換させ、本文のプリントを与えて黙読させる。その後で再度発問し、解答の確認をしながら採点させる。この作業によって hearing ability を rapid reading ability に転移させることをもねらいとしたのである。事実、学生がしだいに和訳なしでも理解する態度を示すようになったことで、このねらいがかなり達成されたことが示された。

③ Lab Work の教材には、本文の repetition drill 及び本文の内容に関する question-answering drill (主として special questions) が含まれる。次に後者の例をあげる。

- 1) What is your name? @
My name is Haruo Tanaka. #
- 2) How old are you? @
I am fifteen years old. #
- 3) What junior high school are you from? @
I am from the First Junior High school. #
- 4) How far is your house from this senior high school? @
It is two miles from here. #
- 5) What year are you in? @
I am in the first year. #
- 6) How do you come to school? @
I come to school by bicycle. #
- 7) How long does it take you to come to school? @

昭和46年1月

It takes me about ten minutes. #

etc.

④毎回必ず drill の成果を評価するための聴解力テストを実施した。これは学生の motivation を維持する上で非常に効果があった。形式は次のように選択式及び記述式の2種類とした。

A. Choose the right answer.

- 1) a. I am in the third year of junior high school.
b. I am in the first year of senior high school.
c. I am in the second year of senior high school.
- 2) a. My house is two miles from the First Junior High School.
b. My house is two miles from this senior high school.
c. My house is two miles from my father's factory.
- 3) a. It takes me about ten minutes to come to school.
b. It takes me about fifteen minutes to come to school.
c. It takes me about twenty minutes to come to school.

etc.

B. Answer in English.

- 1) How old are you?
- 2) How do you come to school?

etc.

⑤筆答評価の B の問答を、はじめに teacher-pupil dialog, 最後に pupil-pupil dialog にまでもって行ってしめくくる。

この形式の授業を開始して約半年後、以前ほど活発な反応が見られなくなってきたのに気がついた。その原因は主として次の2つにあることが判明した。

(1) 本文の repetition drill が、全文を2回ずつくり返すだけの機械的で単調な練習だったため、倦怠感が生じた。

(2) question-answering drill で、本文がそのまま答となる場合は暗記していれば問題なく答えられるが、部分的に変えなければ答えられない場合、表現力の不足のため答がすばやく出てこなかった。

この事態の改善のため、次の方法を実施した。

(1) 全文をくり返す練習 (mim-mem drill) は Pre Lab Work で徹底して行うことにし、LL では重要文

の repetition 及びそれから疑問文を作る練習 (transformation drill) を行う。質問に答えるだけでなく、みずから質問をする能力をも養うためである。当然この drill の成果を評価する問題もテストに加える。

(2) transformation drill と question-answering drill を統合し、自然な対話の形で学習の定着をはかるよう、Post Lab Work はさらに徹底して行う。

次に新形式による最初の授業 (教材番号16) に実施した "Sir Alf" (旺文社 My English Readers for Senior High School BK. 1, Lesson 9. Three Jokes) から transformation drill の例をあげる。

- 1) A few days ago a new pupil arrived at our school. #
Who @ Who arrived at your school a few days ago? #
- 2) His name was Alf. #
What @ What was his name? #
- 3) After a few days we became friends with him. #
When @ When did you become friends with him? #

etc.

この改善策の実施後、学生の反応は再び活発さを取りもどし、またテストにおいては構文の誤りが目立って減少していったことが注目される。内容中心の練習であっても、英文の構造に対する直観力を育てることなしには不正確なものになりやすいのは、けだし当然だろう。

なお授業の展開、教材の詳細及び実施の結果については「現代英語教育」12月号に "Situation を重視した LL 教材作成の試み" というテーマで掲載されている。

5. おわりに

LL 教材の研究は今日各地の LL 設置校及び LL 研究団体が続けられている。ここになお 2, 3 の例をあげたい。

宮城高専の報告を見ると、⁽¹⁷⁾ 同校で作成した LL 教材は、内容よりもむしろ構文中心である点は本校の場合と異なるが、教室教材との密着性と普遍性のどちらにも偏らない方向を志向するという点では本校の教材と共通性をもっている。

NHK 学校放送では高校生向けの oral English の番組を放送しているが、LL 用教材としても利用できるものである。本校でも現在、1, 2 学年ともに LL の時間として週 1 時間しかとれないので、B タイプの教材としてラジオ学校放送の "Listen to Me" を編集して使用して

いる。

高視協 (全国高等学校視聴覚教育研究協議会) では、日本の高校生の実態にそくした話しことばのプログラムの作成にあたっては、本年度 "Oral English Program for Senior High School" として完成を見ている。市販教材及び高校用教科書を分析した結果得られた sentence pattern drill を中心に dialog, story 等を配列してあるので、教科書教材を発展させた応用練習としての活用が可能である。

研究社では文部省検定済教科書 The New Age Readers の附属教材として、英会話演習用の The New Age Dialogues をテープつきで発行している。LL にも使用できるようにになっている。

本校では、来年度の第 1 学年で上記の教科書を使用するので、LL 教材も上記のものにする予定である。これは教科書の本文を直接の教材とするのではなく、各課毎に内容を新しい一つの dialog に書き改め、そのあとに主要単語の発音練習、慣用語の使用法、質疑応答の反復練習ができるように編集されている。この形式によって前述のリーダーと密着させる場合に生ずる 2 つの問題——文体と hearing ability の養成——も克服され、有効な練習ができるものと期待される。

市販教材より自作教材の方が望ましいことは当然であるが、その作成に要する時間と精力の点で効率が悪いこともまた事実である。したがって「教材作成に専門家の登場を期待」する声もおこってくるわけである。⁽¹⁸⁾ さしあたっては、現行教科書と何らかの関連のある市販教材を、学生の実態に合せて自家編集することが現実的な解決策であろう。その意味でも、上記の教材と同種のものがもっと市販されることが望まれる。

今まで、LL の生命はその教材にあるという立場から論をすすめてきた。本校の場合、LL を一斉指導の形で用い、再生練習のときだけ各人の pace に応じた練習をさせているのであるが、LL の特性をもっと生かすためには、各人の能力に応じた学習ができるように、数種類の教材を数個のチャンネルから流すのが本来の方式であろう。また hardware の面でも、テープレコーダー本体の改善 (例えばカセット式にするとか)、視覚機器 (OHP, VTR 等) の導入、集団反応測定機の設置など、改革すべき点は多く、そうすればするだけの効果は当然生じるだろう。

ただ、以上のことを実施するためには、多額の子算と十分な人員が必要である。現在でさえ教材作成のためには多くの時間と労力を使っているのであるから、本校の場合、現在以上の教材の多様化、hardware の効果的使

用は現状では不可能と言わざるを得ない。黒田巍氏が述べているように、英語教師の他に「事務員や機械を管理する技術員やタイピスト等、LLの運営に必要な人員を十分にそなえて」いて、「はじめてLLというものが、その機能を発揮し、効果をあげることができるものだ」(19)からである。

<註>

- (1) Sony LL 通信 No.23 西本三十二：教育の近代化と外国語教育 p. 8, 1968
- (2) Robert Lado : Language Teaching p.173, McGraw-Hill 1964
- (3) ibd. pp. 173~174
- (4) 現代英語教育 Vol. 6, No.12~Vol.7, No.2 河野守夫：音声教材利用上の問題点と対策
(1) pp.20~23, (2) pp.12~13, (3) pp.16~19, 研究社 1970
- (5) English Teaching Forum Vol. VIII, No.2 Juck.Ryoon Hwang : Current Theories of Language Learning and Teaching p. 27, the Information Center Service of the United States Information Agency 1970
- (6) 福原麟太郎著作集9「英語教育論」 p.571, 研究社 1969
- (7) 佐々木達夫他：英語の授業改造 pp.15~16, 明治図書 1967
- (8) 現代英語教育 Vol. 4, No. 8 足立正治：LLにおける変形理論の導入 pp.35~38, 研究社 1967
- (9) Sony LL 通信 No. 13 天満美智子：高校用LL教材の基本的要素 p. 4, 1967
- (10) 「語学ラボラトリーの計画と運営」 長谷川信：音声教材使用の理論と実際 p.127, 教育工学社 1968
- (11) Language Laboratory 第8号 高橋満：英語構造の考え方とその体系的録音教材化 p.49 語学ラボラトリー協会 1968
- (12) 例えば 新潟高等学校英語科：Drills in Basic English Structures I, 1965
II, 1966
- (13) 例えば 高田高等学校英語科：The New Art of English Composition LL テキスト, LLA関東支部高田研究会資料 1969
- (14) 例えば Sony LL 通信 No.24 茶野光雄(愛知高等学校)：教科書に密着したLL学習プログラム pp. 2~5, 1968
- (15) 例えば 英語教育 Vol. XVI, No. 6 槇川正巳他(松江工業高等専門学校)：LL語学教育の実践 pp.21~23, 大修館 1967
- (16) Sony LL 通信 No.27 戸田豊：学習評価の形骸化を避ける p.10, 1969
- (17) 宮城工業高等専門学校紀要 第6号 斎藤克己：LL教材研究—英語Aの活用—pp.139~147, 1970
- (18) Sony LL 通信 No. 13 若林俊輔：LL教材センターの構想 p. 9, 1967
- (19) Language Laboratory 第9号 黒田巍：巻頭言 p. 1, 語学ラボラトリー学会 1969